



という気持ちがあればさらに浸透していく活動だと思いません。しかし、ワンガリさんは「勿体無い」という言葉には「三つのR」という表面的な事だけでなく、言葉の奥には「努力」や「苦勞」、「時間」や「歴史」など、せっかく積み重ねてきた事を「失ってしまう」「無にってしまう」ことへの無念と悲しみがあるという事に気づかせてくれました。せっかく入れたコーヒーを目の前でこぼしてしまつたら、「おいしいコーヒーをあなたに飲ませてあげたい」と思ってコーヒーを入れた人の「苦勞」や「気持ち」を無駄にしてしまった事に対する申し訳なさ、情けなさ、そういう気持ちが込められて、つい「勿体無い」という言葉が出てくるというのです。普段、「勿体無い」という言葉を使っている場面を考えると、本当に色々な思いが込められている事に気づきます。

か。それは、日本がもともと資源の少ない国で、貴重な資源をいかに有効に、有意義に使うかといった事が日本で生きていくためには絶対的に必要だったからだと思えます。これは今の地球にも当てはめられる事でもあります。資源の有効利用を考えると、日本は「勿体無い」先進国なのではないかと思いました。江戸時代、割れた茶碗を直す「焼継屋」、鍋や釜を修理する「鑄掛屋」、鼻緒をすげ替えてくれる「朴齒屋」、「たが屋」「鏡研ぎ」「錠前直し」等々、今では読み方もわからないような修理屋さんが多く活躍していたそうです。また、古着や紙くずはもちろん、傘の古骨やかまどの灰にいたるまで回収業者がいてあらゆるものが修理、再生を重ね、使い切られていたため、江戸のような大都市でも、ごみが散乱するようなことなく清潔な暮らしをしていたとの事でした。僕は、この部分を読んで、何か日本人として誇らしいような気分になりました。物を使い切つてごみを最小限にし、清潔な町を維持していく。これこそが、

限りある地球に住んでいる僕たちにとつて、理想としなければならぬ形だと思えます。それを、僕たちの祖先である江戸時代の人達が実現していたという事に、驚きと感動さえも覚えてしまいました。しかし、現代の日本はどうでしょうか。僕のまわりを考えたとき、かなりごみに溢れていると思えます。レストランや家庭やコンビニで捨てられる食品、ごみの六十パーセントを占めるといふ包装ごみ、まだまだ使えそうなテレビや冷蔵庫、自動車等の粗大ごみ等、このまま行くと日本はごみの国になってしまふそうです。江戸時代に比べると、現代の日本は豊かだけれど汚いといえるのかもしれない。日本人の「勿体無い」の精神はどうなつてしまったのでしょうか。今でもお年寄りには「食べ物粗末にするのは勿体無い」「まだ使えるのに捨てるのは勿体無い」と「勿体無い」を実践している人は多いと思えます。でも、若くなつてくるにつれて「勿体無い」という言葉は使わなくなり、実際の行動に結びついていない事の方が多い

なつていくように思えます。限りある地球に生きていくのだから、「勿体無い」精神をも一度思い起こして一人一人が少しでも行動に移せたら、世界が元氣になつていくのではないかと思いました。

「木を植えた男」を読んで
本川根中三年 中村美王

今、地球上では、様々な環境問題が引き起こつています。オゾン層の破壊、大気汚染、水質汚染、そして森林破壊。まだまだ数え切れないほどの問題があります。私は山に囲まれ、自然が豊かな土地で育ちました。これはとても幸せなことだと思えます。見わたせばたくさん木がある、それが当たり前。そんな生活をしてきました。私が環境問題

